

## LMS の活用を促す授業設計

## Lesson Design for the Activation of the Practical Use of LMS

穂屋下茂<sup>\*1</sup>, 藤井俊子<sup>\*1</sup>, 田代雅美<sup>\*2</sup>Shigeru HOYASHITA<sup>\*1</sup>, Toshiko FUJII<sup>\*1</sup>, Masami TASHIRO<sup>\*2</sup><sup>\*1</sup>佐賀大学全学教育機構<sup>\*1</sup>Organization for General Education, University of SAGA<sup>\*2</sup>佐賀大学学務部教務課<sup>\*2</sup>Academic Affairs Division, Academic Affairs Department, University of SAGA

Email: hoyashis@cc.saga-u.ac.jp

あらまし：インフラの整備に対して、ICT を利用する方法や知識が不足しているため、教育現場ではまだ LMS（学習管理システム）が有効に活用されているとはいえない。そこで教育での LMS 活用を促進するため、教える立場・学ぶ立場双方からの e ラーニング利用について学ぶ授業「教育デジタル表現」を教養教育の科目として開講してきた。ここでは授業を行う教員もさまざまなツールを併用して授業を実践している。本稿では、今学期に取り組んでいる本授業の授業改善の取り組みについて報告する。

キーワード：LMS, ICT 活用教育, 授業改善, 教材作成, 就業力

## 1. はじめに

ICT の有効活用のひとつとして、本学では、教える立場・学ぶ立場双方からの e ラーニング利用について学ぶ授業を行っている<sup>(1)</sup>。講義では、学習管理システム (LMS) として本学が使用している Moodle について学び、学生の立場で学習における e ラーニング利用について学ぶ。さらに教育のシナリオや PowerPoint を利用したプレゼンテーションなど e ラーニングに関する基礎知識を学ぶ。その上で、教員の立場で利用できるサイトを使って、実際にグループで e ラーニングを利用した授業のコースを作成する。(図 1 参照)

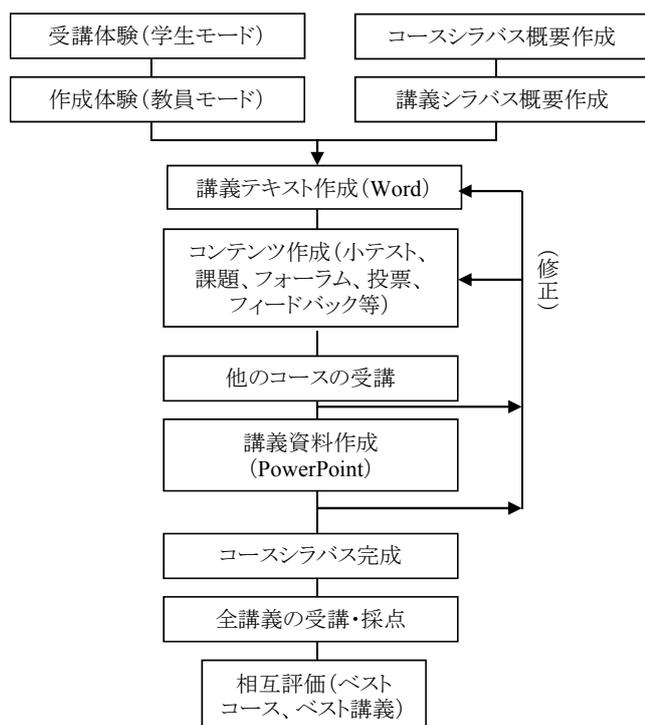


図 1 学生の講義作成手順

学生が LMS の教員権限で「e ラーニングでの授業を作成する」という授業の中で、受講者は教員の立場で LMS を使用するとともに、実際にこの授業を行う教員自身がさまざまな場面で LMS を始めとする ICT を活用することで、幅広い活用方法も体験していく。本稿では、今学期に取り組んでいる本授業の授業改善の取り組みについて報告する。

## 2. 授業における ICT の利用

毎回の講義では、まず LMS のこの授業のコースにアクセスしてその日の授業シラバスを確認する。その時間内での到達目標を明確にするとともに、その日の最終成果物、提出すべきもの、次回までに終了しておくべき課題、などを説明する。それから授業に入るが、図 1 にもあるように講義は個人で作成するが、コースはグループで協力して作成する。授業内では対面でのディスカッションが可能であるが、様々な学部・学年の学生が履修しているため、時間外にディスカッションすることは困難である。そのため、オンラインでのディスカッションや情報共有のために、様々なフォーラムを使用している<sup>(2)</sup>。Microsoft Word や PowerPoint を使った教員からの LMS を介した資料提供や、学生の課題作成および提出、など授業の中で「必要に応じて活用する」方法を体験していく。技術伝達に特化するのではなく、就業力も考えた使える技術の習得を目指している。

## 3. 授業に関する改善点の検討

毎年、授業時間毎にアンケートをとり、学生の学習状況の把握に努めてきた。その場で対応できることはすぐに実行し、到達目標を維持しつつ改善に努めてきた。しかし、毎回課題を行う時間の確保が問題となっている。また、授業に出席しないせいで、毎年 1~2 割の学生が単位を取得できていない。

そこで、今回はこの2点を重点にして、授業の見直しを行った。全体像を図2に示す。

### 3.1 自学学習を促す改善

授業時間毎のアンケートで、学生の学習状況の把握に努めてきたが、課題を行う時間の確保がほとんどできておらず、グループでの作業が間に合わないことがしばしば起こっていた。そこで今年度は、出席の厳格なチェックとともに、自律した学習を促す工夫をした。

まず、授業が終わった段階で「授業報告」として、「授業の重要なキーワード」と「授業の取組」に関する簡単なチェックを行い、「授業の感想や意見」を書かせる。それとともに、「来週までに行うこと（予習・復習・自学学習）」を記述させて、自分の学習目標を明確にさせた。

そして次回の授業の授業開始時に、アンケートとして、「先週の授業後今週の授業までに授業外での学習時間（予習・復習・自習）をどのくらい確保したか」と「何を行ったか」を記述させて、自分自身の学習状況の振り返りを行うようにした。

PCを使用した授業では、学生のアクセスログをチェックすることで出欠管理は簡単にできるが、LMSを利用することで、単に出欠だけでなく毎回の授業の振り返りと記録を取ることも可能になる。また、「教室外からのアクセスは出席にはカウントしない」「時間制限をしている（授業開始後10分まで）」とすることで、遅刻者は激減した。

### 3.2 途中放棄者を減らす改善

この授業は教養教育の主題科目で、自由に選択でき指定の単位数を卒業までに取得すれば良いため、例年履修登録をただで一度も出席しない者、1、2回出席ただで来なくなる者、他の授業での経験から出席は適当でも単位がでると思込んでいる者などが何名もいて、毎年1～2割の学生が単位を取得できない。LMSのフォーラムで出席を促しても、出席しない学生に対してはあまり効果が得られなかった。

本学では、入学時に全学生に配布されるメールアドレスとは別に、教務ポータルシステムに自分で好きなメールアドレスが登録できるため、多くの学生は自分の携帯アドレスを登録している。そのため、LMSのフォーラムに掲示をしたり、学生にメールを送ったりしても連絡が取れない状況が多発している。

そこで、今回から①「授業で使用しているLMS」と②「簡易LMS機能を併せ持つ教務ポータルシステム」の機能を併用して、それぞれの特徴を生かした利用を行っている。通常は①を使用するが、授業に出席していない学生に対する連絡は、②を利用するようにした。欠席者には、「次回までに休んだ分の

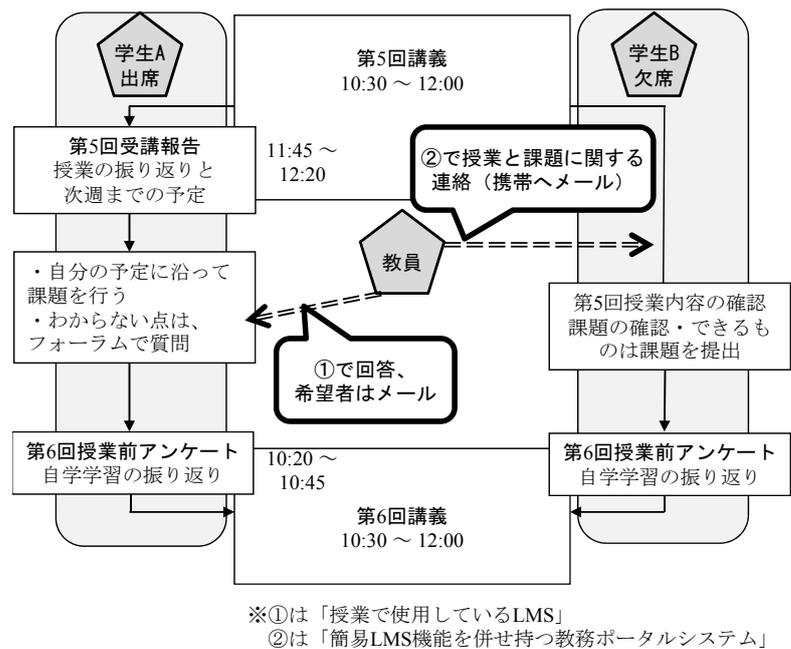


図2 授業に関する改善

学習をしてから授業に臨むこと」というメールを送り次回の授業への出席を促す。この効果もあるのか、今年度は、履修登録をただで一度も出席しない者は0名、1、2回出席ただで来なくなる者が1名、現在8回目の授業が終わった段階でも、欠席した学生も授業を気にかけてLMSにアクセスする状況が続いている。

## 4. まとめ

今回、毎時間の授業の振り返りに加えて、自学時間の振り返りを導入したことは、授業へのモチベーションを持続させる効果として授業の出席状況などに現れている。

また、本来ならば、システムが一元管理され、シームレスに使用できれば問題がないのかもしれないが、今回2つのメールシステムを併用するという一見使いづらいような方法を取り入れたのは、とにかく「学生が出席しないことには授業が成り立たない」という思いからである。今回の授業改善で、少なくとも初期段階での授業放棄者は激減した。これは、LMSの効果的な使用方法のひとつと考えられる。最終結果を判断して、継続的な実践と、多くの科目での利用に向けて、さらなる改善を検討したい。

### 参考文献

- (1) 藤井俊子, 田代雅美, 穂屋下茂: “授業におけるLMS活用の実践事例—LMS利用促進を目指した授業—”, コンピュータ&エデュケーション, Vol.31, pp.66-69 (2011)
- (2) 穂屋下茂, 藤井俊子: “LMSのグループディスカッションを用いた自己啓発型学習の試み”, 平成20年度工学・工業教育研究講演会講演論文集, 1-212, pp.200-201 (2008)